



夏
野
道
遠

R18
-ADULT ONLY-



あまり睨んで
やるなタナトス



しかし
ヒュブノス!

わ、我々神が
こんなウジ虫の
ような人間に……!

そんな人間に
敗北して肉体を
失った我等の
失態だタナトス



そしてこうして
肉体を復活出来たのも
そのペガサスの
お陰であろう

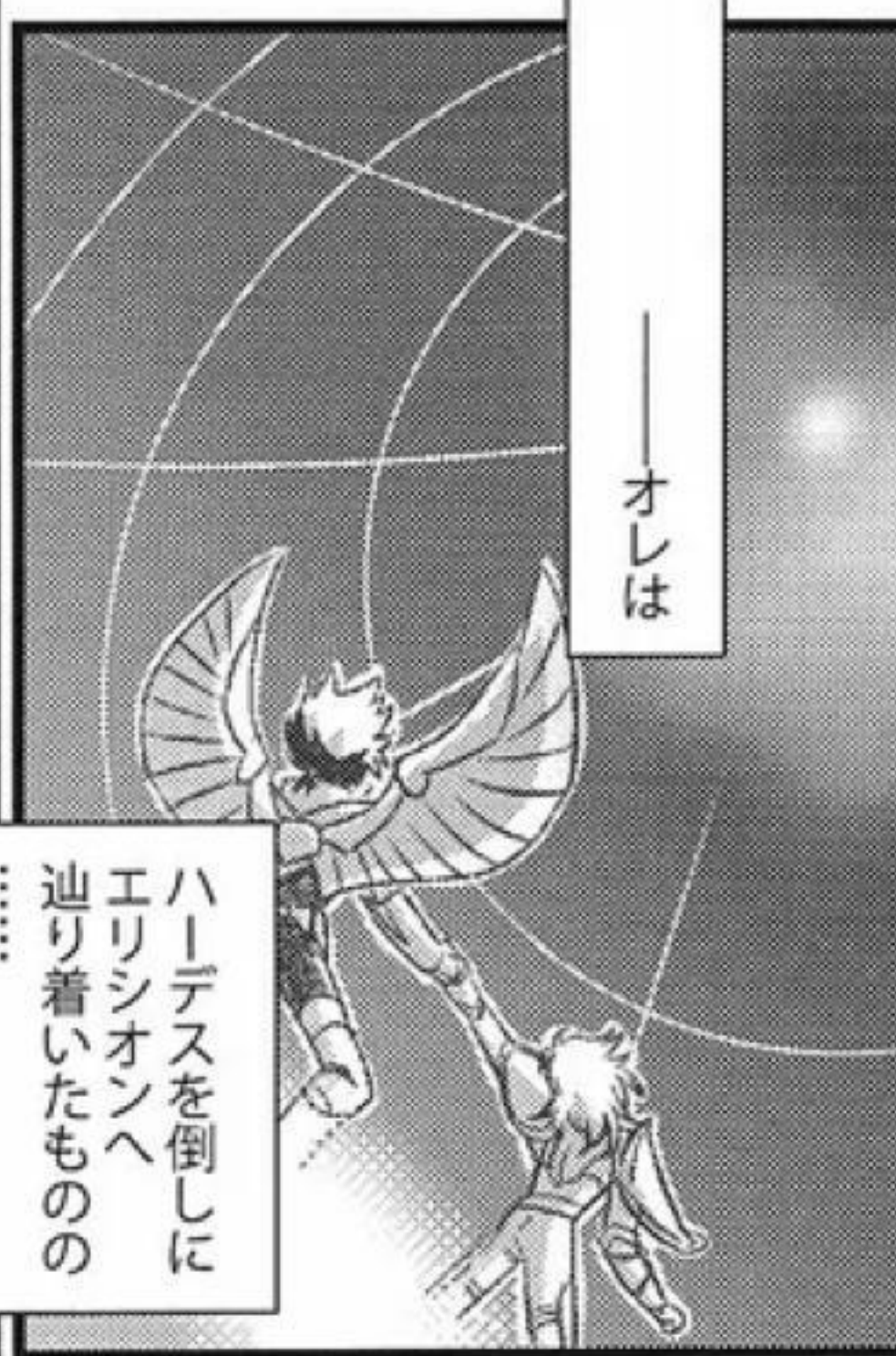
くっ……その事実だけでも
肉体ごと散り散りにして
異空間にばら撒いて
やりたい所だ……!





アテナを失い

ハーデスに
この身を汚された



——オレは

ハーデスを倒しに
エリシオンへ
辿り着いたもの
……



聖衣は粉々になった
部分以外、自己修復で
少しは戻ったが

冥衣が戻る
ことはなかった



ハーデスから
小宇宙(と精液)を
注がれて右手は
冥衣化……

あれからキスはされても
犯されてはいないお陰で
これ以上の侵食は
防いでいるもの……



これ以上
冥衣化する前に
ここから
出なければ……

でも
どうやって……

冥天ノ籠獄



★前作「冥天ノ籠獄」の続きものですが、この本単品でもお読み頂けます。
聖戦Fで星矢だけが生き残ったパラレルストーリーです。

★ハデ星前提のヒュプ星・タナ星有り。

★アナル攻め・フェラ・触手等の描写があります。

とにかく何でも許せる方向け。地雷のある方は自己責任でお願いします。



まだお前達の
体は万全では
ない

元に戻るまで
アテナが再び地上に
降臨するまでの時間は
掛かるであろう

ヒュブノス
タナトスよ

今はそれまで
体を休めるがよい



はっ

ハーデス様



不調な時は
死なぬ程度に
ペガサスから
補給を許す



人間などから
与えられるのは
屈辱であろうが
ペガサスは
最早余のものよ

おっ

なッ
オレはもがッ



お前達の
体の媒体は
余とペガサスの
小宇宙と精だ



つまり

こういう事
ですね



ベガサスの
小宇宙と精...

なるほど
承知致しました

お許し
有り難く存じます

わが
わが

...って
補給って
なんだ??

?



なッ

ヒュプノス!?



んッッ!?



……ふむ

確かにこの程度では
時間が掛かりますな

パストル……

ふっ……

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ



……

お……これは……
地上に……ッ

人間である
ペガサスもここに
居る限り老いなど
ないのだからな

……

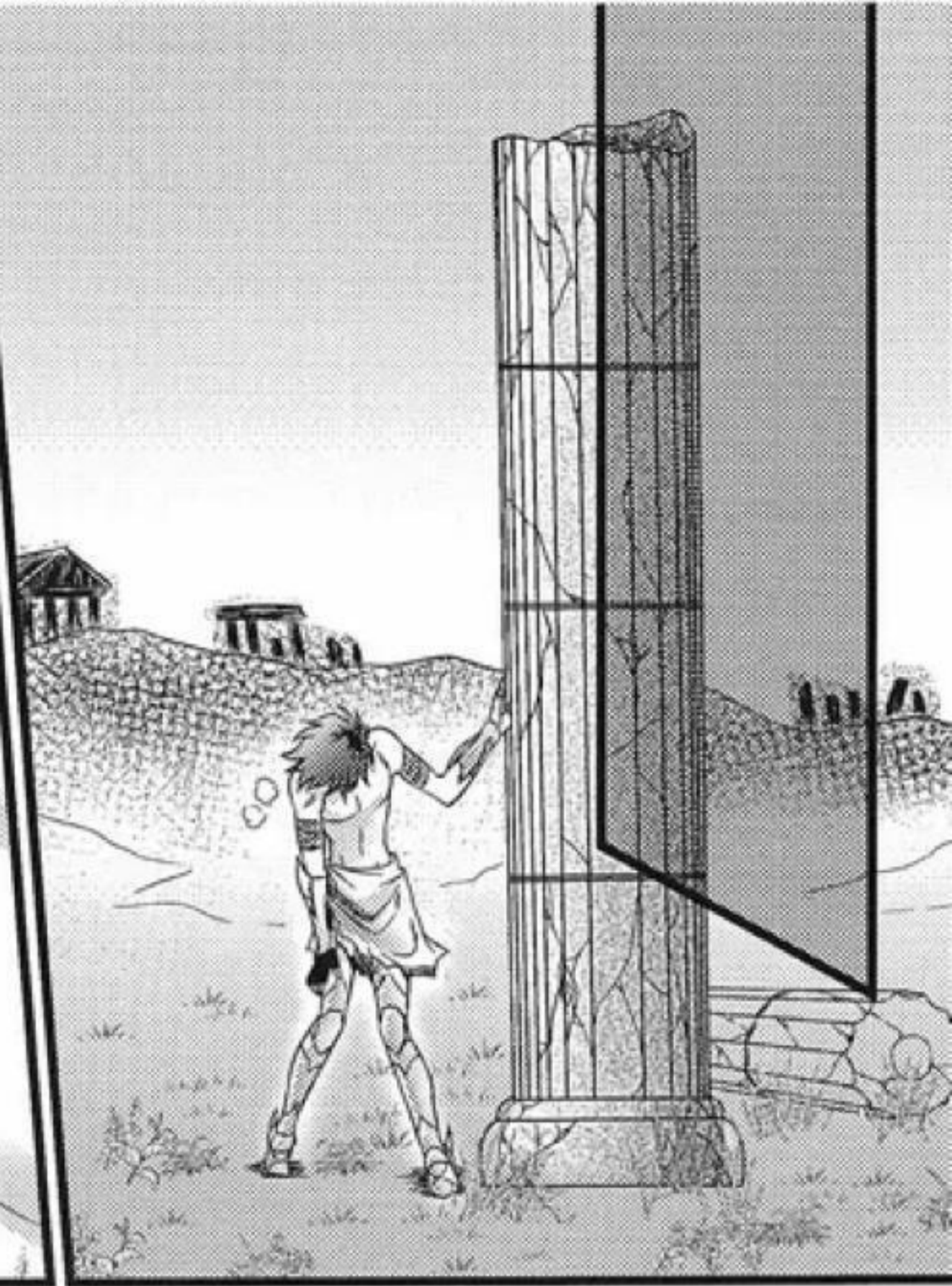
まあ
まだ時間は
ある

エリシオンでは
悠久だ



くそッ…

好き勝手
やりたい放題
しやがって!



— だけでも
どうしたら
ここから
出られるんだ…

ずっと遠くまで
来たはずなのに
果てが見えない



ヤガ

ヤガ

今はともかく
もっと遠くまで
……



お前の大事な
姉が短い寿命で
死ぬ前にな!

……



うわッ!?

ほう…大分抜いた
つもりだがまだ
余力はあったか



ハハハハ



トビ

ぜったい
戻らねえ!!



我等がいる前では
エリシオンで
好きにはさせぬぞ
戻れベガサス

ヒュプノス!!



お前の全ては
ハーデス様の
もので
選ぶ権利はない



ん…

な…コレ…ッ

この憂に触れられて
いる部分が…
なんかムズムズするッ…



オレはアテナの
聖闘士だ!!

その憎まれ口を
叩けるならまだ
抜いても大丈夫な
ようだな

なかなかの
じゃじゃ馬だ
ハーデス様も羨け
甲斐があろう



…ふあッ



なかなか活きの
いいお前を蹂躪
してやれぬのは



なんだ…
これ…ッ



些か
残念ではあるが



気が…
へんに…な…

だがお前から
精を抜いても
汚すことは許されて
おらんのでな



こちらならより濃厚な小宇宙と精を含んでいるだろうからな

こちらを頂こうか

やっめ……



ヒッ

あッ……

あ……



ひあッ……

うああああああ!!



へん……に……

なる……ッ……ッ

びびび



これ…以上…

好きに…させ…
たまる…かよ…

キッ

ココはそうでも
ないがな？



は…

フ…
アテナの聖闘士も
所詮は人間…
堕ちたものよ

アッ…

ちが…

も…やめ…



あああああ

アッ

アッ



は…

辛いだろう？
我慢せず欲望のまま
吐き出して良いのだぞ

は…



早速お楽しみか
ヒュプノス

いつまで
ハーデス様を
お待たせさせる気だ



ふむ…

ハーデス様の僅かな
小宇宙も混じり合って
なかなか味わい深い



喜べ人間

偉大なる
冥王ハーデス様の
寵愛をその身に
受けられることをな!!

ふむ…

ける、な…っ



ハーデス様も
気まぐれなお方だ

よりもよって
人間…しかも
アテナの聖闘士
などハーデス様の
仇でしかないで
あろうに



ハーデス様の御前に
引きずり出す前に
その小生意気な態度を
改めさせてやるわ



まだ強がる
気力はあるか



ナカを…
こす…ツツ



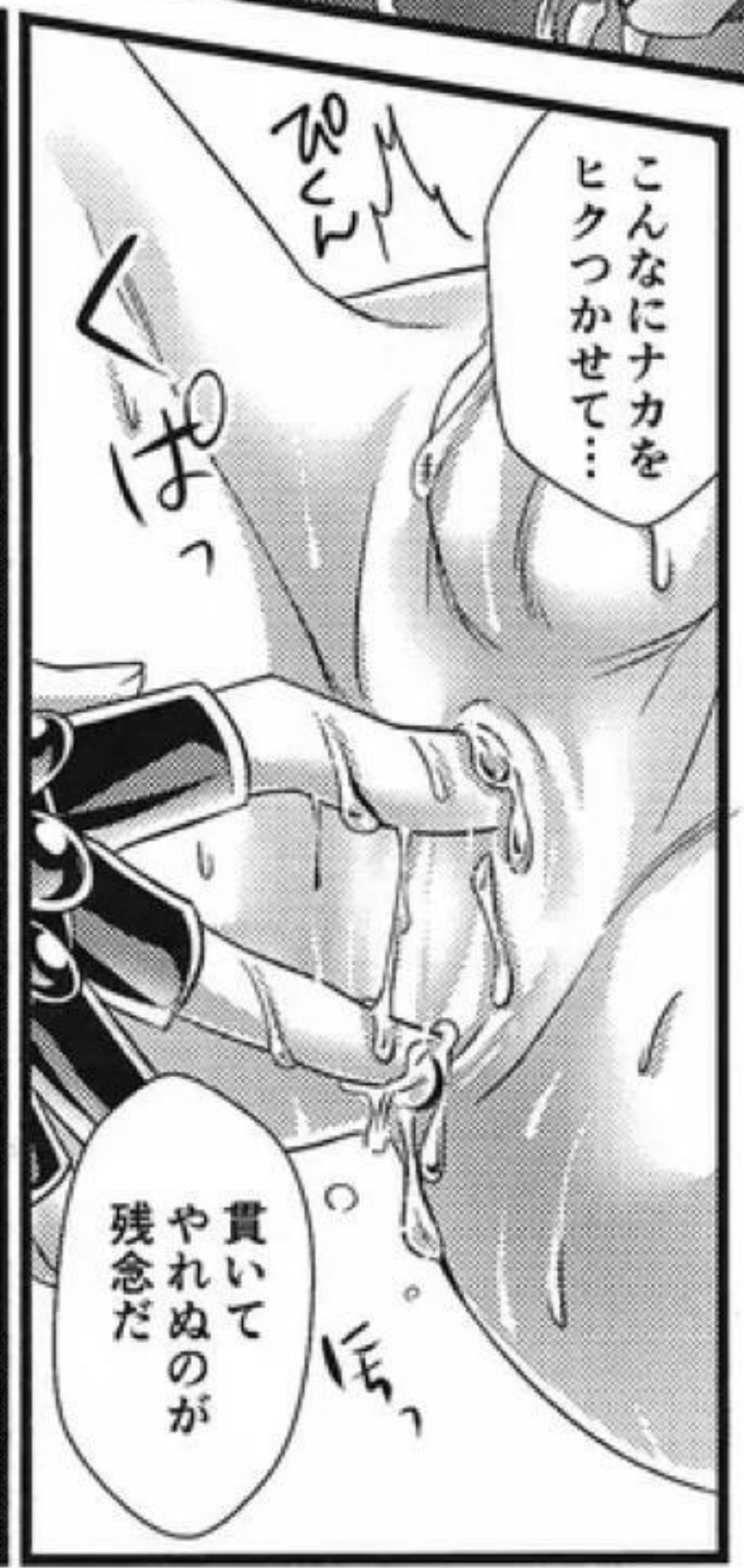
精々愉しませて
みせるがいい人間!

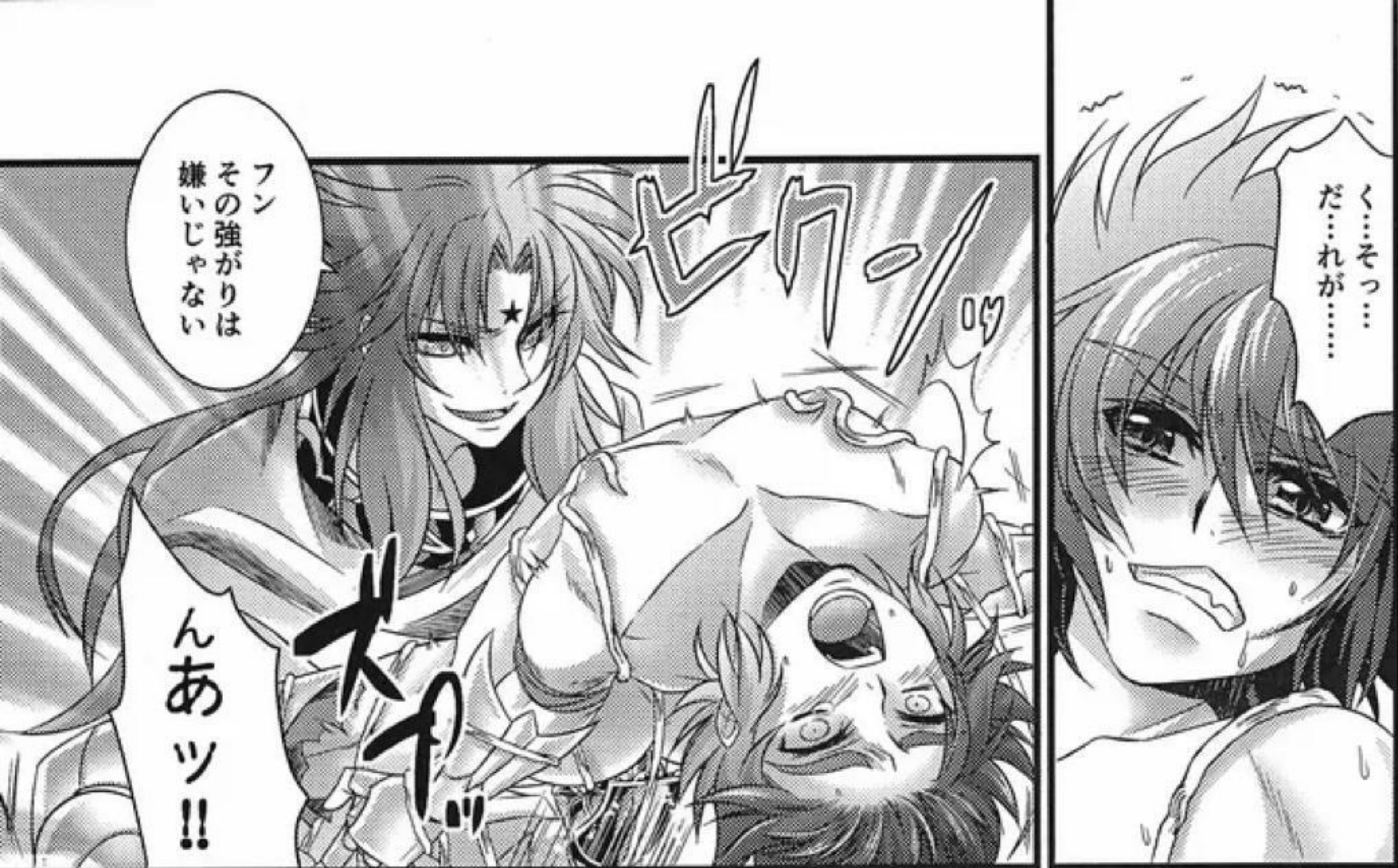


人間ごとき
ウジ虫はしおらしく
ハーデス様の物に
なっておればよいのだ



あッ、ああ!





く…そつ…
だ…れが…

フン
その強がりは
嫌いじゃない

んあッ!!

ズッ
ズッ



や…あ
そ…こ…

やめ…ッ



どうだ?
情けない声で
啼く己の姿は

まるで
メスのようだな
クッククク



精々
ハーデス様を
飽きさせぬ
ことだ

まあ下げ渡されても
飽きるまでは我等が
可愛がってやるがな

ズッ
ズッ

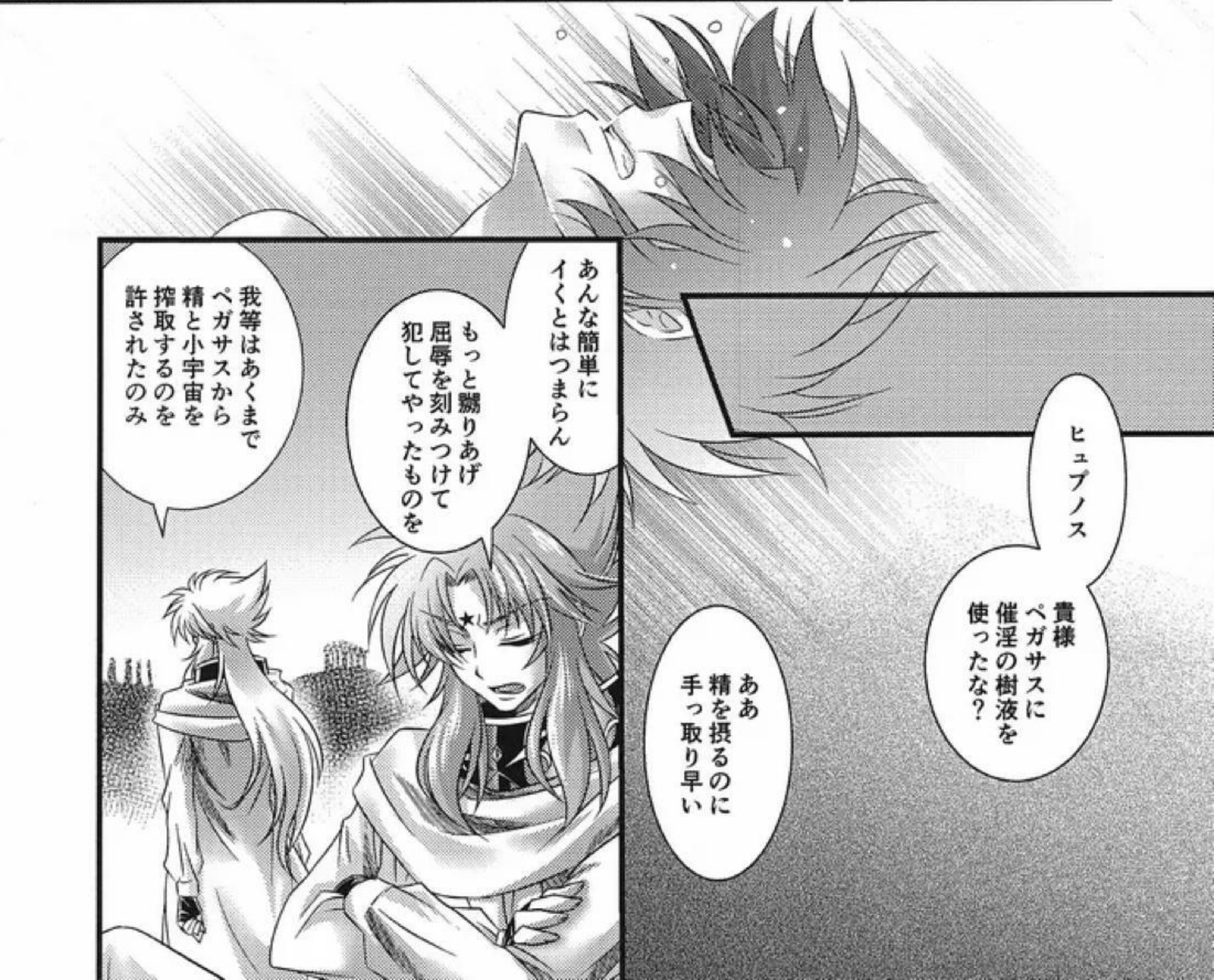


そら、
神に供物を
捧げろ人間！

あゝあゝあゝ

アッアッアッ

いッ……



ヒュブノス

貴様
ペガサスに
催淫の樹液を
使ったな？

ああ
精を摂るのに
手っ取り早い

あんな簡単に
いくとはつまらん

もっと鬨りあげ
屈辱を刻みつけて
犯してやったものを

我等はあくまで
ペガサスから
精と小宇宙を
搾取するのを
許されたのみ



あまりペガサスを
刺激させ過ぎては
あのお方のことだ…

折角手にした
ペガサスを
壊しかねん
からな



……あ



目覚めよ
ペガサス



さて…
双子神に随分と
可愛がられて
いたな



だが双子神には
お前を汚すことは
許しておらぬ

もう…
力が入らない…

そろそろ
物足りないで
あろうか？

いやいや
無理！無理だっ
つーの！

——ッ
ぜ…ぜん…ッ
足りなく…な…
も…いらな…
…ッ



そうか
余に腹いっぱい
注がれたいか

一言も
言っていない!!



お前が地上に
帰りたいと
言うたび…

余から
離れようと
するたびに

余をたっぷり
お前に注ぎ、
刻み、教え込んで
やろう

ゆちゅん



地上より

アテナより

お前が乞い
求め欲する
べきは

余のみだ



お前

ひん



ひん



お前を
満たせるのは
余だけだ
ペガサス

ひん

ひん

ひん

お前

ひん



お前はココが
好かったの
だったな



ああ
タナトスとの
情事を視ていたが



余が許した
とはいえ…

余以外にお前が
啼かされているのを
みると腹立だしい



そうだな…
今回は3日だけ
このまま余に蹂躞
されることを
許してやろう

暫く寝たきりに
なるであろうが
その間も愛でてやる



つまりらぬ
希望も地上も
全て諦めて

早く楽に
なれると
よいな？




カキカキ
カキカキ


クワッ
クワッ
クワッ



好い色に
染まってきたな




闇に染まった
お前はさぞかし
美しいのであろうな



そんなお前が
血に染めたその手で
アテナと地上を
滅ぼす様が見たい

ククク…



ああ今から
愉しみだ…





なあ

余の
ペガサス

END



「——も、う、やめ……」

ハーデスの下で天馬座が許しを請う。何度も何度も体を繋げられ、強制的に快楽を味合わせられて意識も飛ばされていたからだ。

いくら快楽に酔わされようと、何事にも限度はある。だが幾度となく意識を飛ばされているにも拘らず拒もうとするのは、天馬座として、なにより雄としての本能的な拒否だろうか。だとすれば、なんとも残酷な事である。何故ならばハーデスにしてみれば、そのような行為は己を拒もうとする天馬座をより屈服させるに足る愉悅でしかないからだ。

幾度となく身体を重ね小宇宙を浸食させているというのに、尚歯向かってくる天馬座が愛しくてならない。今も快楽に屈しそうだというのに睨みつけてくる様が愛らしく、より猛った剛直で腹の奥を抉っていく。

完全に己のものに染めきるのが楽しみが故更に昂ぶり、天馬座の腹で勢いのまま天馬座を貪り穿つ。天馬座にしてみれば、まさに負の連鎖だろう。冥王にしてみれば愉悅だろうが、凶悪な代物を何度も挿入されている天馬座としてはたまったものではない。今にも意識が飛びそうであり、かすれた声であ、あ、と言葉にならない単語を発している。

何度も抱き解し、己の物を覚え込ませたからか、天馬座の腹はハーデスの物を柔軟に銜え込み蠕動しうねりからんで、よりハーデスを昂ぶらせて快楽を双方に刻み込んでいく。少年らしく細くも、だが戦士として鍛えられたしなやかな身体が、ハーデスがもたらす快楽によって振動し跳ねる様は何とも淫靡で艶めかしいものがあつた。

「……！ ハー、デス」

「斯様に余を煽るな。より啼かせたくなる」

「煽って、なんか、いねえ！」

「……そうか？ ならば余の動きに合わせて腰を振っているのは見間違いか？」

「な！」

ハーデスの言葉は真実であり、真実であるが故に残酷であった。無意識からか、それとも慣らされたからか、身体はハーデスの動きに合わせて勝手に動き快楽を貪っている。ぐちゅぐちゅと接合部がいやらしい音を立てており、それが否が応にも背徳感を感じさせて止まない。

一旦認識してしまつたせい、腹の中の剛直をより締め付け感じてしまう星矢。

「やだ！ こんな、俺じゃ……！」

「いいや、それも貴様だ。何故、拒む？ 快楽の何が悪い？ 神の寵愛だ、存分に享受するがいい。安心せよ、天馬座。貴様がどんなに拒もうとも、貴様は既に余のものだ」

口の端を歪めて冥王が笑う。その事に本能的な恐怖を覚え逃げようとするが、逃げられる筈も無い。引きかけた腰を強く掴まれ、行為が続行される。だが痛みを伴つたものではなく、より快楽を得られるものだった。星矢の弱点を知り尽くしたハーデスが剛直にて執拗に攻め立て、快楽を共に貪っていく。

快楽で頭が真っ白になり分からなくなっているであろう天馬座が愛しく、その愛しさのまま口づけし入念に口内も犯しつけていく。身体はおろか、心も何もかも自分の物だと刻み付けるかのよう。

神話の時より何度も歯向かい己の身体に傷をつけた宿敵が、己の下で快楽に蕩けている様は実に筆舌しがたいものがある。だが楽しみは残念な事にいつまでも続かない。

「さて、天馬座よ……出すぞ」



「ま……」

星矢の静止を待つ筈も無く、ハーデスの精が小宇宙と共に勢いよく吐き出される。あつという間に星矢の体内を満たしつつも侵食していき、聖衣の浸食も同時に進行していく。同時に達した天馬座も、既に数回目のこともあり流石に気絶してしまつたが、惜しむように星矢から離れる冥王。反応が無いのは残念だが、次回に持ち越すことにすればいいことだ。

——そう、次回があるという事が喜ばしい。

後孔から自身を引き出せば、己が放った精がこぼりと音を立てて零れていく。我ながら良くも出したものだが、その情景に己の征服欲が満たされるのを自覚する。自分の成した行為によって、あの宿敵を屈服させ己の物にしているのだ。その満足感は計り知れない。

ニンフたちを呼び出して天馬座の世話を命じると、自身の体を清める為に場所を移動するハーデスだった。



——ハーデスの元に囚われてから、何度身体を重ねただろうか。

星矢が目を覚まし、目に入ったのは綺麗に清められたハーデスの寝所だった。

神が寝るだけあつて豪華な装飾が成されており、寝具も肌触りの良い特級品である。如何なる処置か、先程まで散々喘がさせられ乱された形跡が微塵も無いのは良い。清められた身体も香油を塗られたのか、良い香りすらする。

清められ豪華な場所に寝かされていた星矢だったが、寝起きも相まって機嫌は最悪だった。

如何に清められたとはいえ散々喘がされた身体の方は、そうはいかない。無理をされたせい、身体の節々が痛く動きにくい。特に腰とか尻が。

他にもハーデスに小宇宙を込められて付けられた鬱血痕が身体の其処彼処にあり、じんじんと熱を持っている。熱と痛みで体が火照り、先ほどまでの情事を思い出させられて腹立たしい。だが何よりも腹立たしいのは、閨事の快楽を自覚してしまったことだ。幾度となく抱かれ続け、慣れたせいもあるのだろうが、冥王の下で腰を振った自分が腹立たしい。

相手の手練手管が優れているせいにすれば気が楽になるのだろうか、それはそれで良いように転がされているようで、やっぱり腹が立つ。結局、全てが腹立たしいに帰結してしまうのだが、どうしようもないのだろう。

現状小宇宙を燃やしても、聖衣や身体に纏わりついている不快な植物が吸い取ってしまう上に双子神の復活にまで利用されてしまうのだ。植物を引き千切っても何時の間にか絡みつき小宇宙を吸収しており、星矢に全くもって不利な事この上ない。以前機を狙いハーデスを倒そうとしたこともあったが、燃やした小宇宙を吸い取られた挙句に双子神の一人が復活し、不甲斐無くも呆気なく敗北してしまった。

その後仕置きだと言われ念入りに犯され乱された挙句、不足した分を補ってやろうと言わんばかりに、ハーデスに小宇宙と精を注がれてしまったのは不覚といえよう。

星矢にとって完全な敗北である。だが何よりも恐ろしいのは、冥王の小宇宙による浸食を心地良いと感じ始めた自分だ。

アテナの包容力溢れ慈悲ある小宇宙よりも、冥王の静寂でありながら雄大な小宇宙に安らぎと心地良さを覚え始めているのだ。



自分が自分でなくなるような恐ろしさを振り払うかのように頭をゆりりと振る星矢。いつまでも負の考えに浸っては居られない。だが現実は無情であり、ゆっくりと息を整えつつ身体を動かせば目に入るのは浸食が進んでいる破壊された聖衣だった。思わず舌打ちをする星矢だったが、だからといって現状が変わるわけでもない。ご丁寧な事に身を清められた後に、再度聖衣が装着されている。……そんなにも己の現状を見せつけたいのだろうか、苛立ちが募る。

既に右手は浸食し終わり、右足にまで進行が進んでいる。この浸食度では、あつという間に染め変えられかねない。このまま完全に染め変えられたら、自分はどうなってしまうのだろうか。本当に冥闘士となってハーデスに忠誠を誓い、地上を攻める存在となってしまうのか。そんな不安が脳内を占めていく。

「……沙織さん、俺、大丈夫かな……」
不安げに呟く星矢だったが、それに応えるものは当然ながら居なかった。

既に次の聖戦に備え、天界にて転生準備に入ってしまった女神。次に会う時、己は彼女の敵なのか味方なのかすら分からない。そもそも転生した女神は自分の事を覚えていたのだろうか。やはり気が弱っているせいかな、次々と不吉な考えばかりが浮かんでしまう。

女神は自分を信じていると言ってくれたが、肝心の自分が自身を信じられそうにない。何せハーデスに良いようにされている現状下で、どう信じろと言うのか。

そうしてすることも出来る事も無く、悩み横たわっている内に疲れからか再び微睡み始める星矢。

——その様子を見られているとも知らないままに。



不安げに呟く星矢を虚空に映して見ているハーデスがいた。別室で寝台に優雅に横たわり、光景を肴にネクタルを楽しんでいる。

横になり寝息を立てはじめた星矢を楽しそうに見ているが、控えているヒュプノスには理解出来ない。ヒュプノスにとっては単に子供が寝ているだけの光景に過ぎないからだ。だが主の機嫌が良ければ、それでいい。

主の喜ばしげな表情を見、ヒュプノスの口元も綻ぶ。そつと主の表情を伺い見れば、表情は待ちわびていた玩具をようやく手に入れた無垢な童のようで、先ほどまで天馬座に無体を働いていた同一人物とは思えない。

「……ハーデス様、よろしいのですか？」
「……何がだ？」

「天馬座に施した暗示の事です」

「良いのだ、このままで」
寝台の横に控えるヒュプノスが問うが、ハーデスは現状維持を示すのみだ。ハーデスが意味ありげに微笑み手を振ると同時に、星矢の姿がぶれた。

其処に現れたのは、完全に直った神聖衣を纏った星矢だ。

ポロポロだったはずの聖衣は美しい装飾が成された神聖衣となつて、星矢の身体を飾っている。眠っている星矢を包むように大翼が覆っていて、一枚の絵画のようですらある。

——神聖衣の色が完全に漆黒に染まっている事を除けば、の話だが。



「……愚かな小僧だ」

「言うな、ヒュプノスよ」

つまりハーデスは徐々に染め上げる気なぞ、最初から無かったのだ。アテナに邪魔される猶予を与える気なぞなく、即座に身体だけでも己の物に染め変えてしまった。

無論女神とて何も抗しなかつた訳ではなく、星矢の心と魂に守護を与えて消えて行つたのは流石と言えよう。これにより、ハーデスは天馬座を完全に手に入れたとは言えなくなつてしまつた。

しかしそれこそが、より天馬座に対する執着心を高ぶらせてしまつたのは女神にとつても誤算だつたのかもしれない。だがやはり一番の被害者は、神々のエゴと愛に振り回されている星矢だろう。

星矢は己の身体や聖衣が既に冥界のものへと染め変えられてしまつたとは知らない上に、心は未だ天馬座の聖闘士のままなのだ。これを憐れと云わずして、何と言うべきか。

それを知つていながら、ハーデスは未だ染めきられていないという暗示を星矢にかけて。

身体を染め変え親和性のある状態にし、更に浸食し続け魂すらも手のうちに入れようという計画だ。つまり聖衣の浸食は肉体ではなく魂の侵食度を表している訳だが、どちらにせよ星矢が冥闘士にされるのは変わらない訳であり、ただただハーデスに都合が良いだけである。

用意周到だがハーデスにしてみれば、身体を染め変えただけでは手に入れ切れたとは言えない。何しろ神話の頃より幾度となく歯向かい、己に傷をつけた唯一の相手。心も魂すらも完全に手中に収めねば安心できない上に、生半可な対応では歯向かつてくることは確実だ。

「しかし、奴を手に入れるのでしたら、魂を抜けば如何様にも……」

「……ほう。余に人形遊びをせよと？」

「……！ 申し訳ありません」

不愉快気に呟くハーデス。付随するように気温も下がり、本気で気分を害したことが分かる。

即座に謝罪するヒュプノスだつたが、それ故に分からない。無論ハーデスの機嫌を損ねたことに対する謝罪は本心からのものだ。

「誤解しているようだがな、ヒュプノスよ。余は、奴の全てを手に入れたいと思つている」

「全て……ですか？」

「そうだ。お前たちにとっては業腹かもしれんがな」

「そのような事はございませぬ。我等はハーデス様の御心に沿うのみです」

恭しく頭を垂れる配下に対し思う所があつたのか、横たわつていた身体を起し姿勢を正す冥王。

確かにヒュプノス達にしてみれば、奴は我等冥界に何度も辛酸を舐めさせた羽虫以下の存在なのだろう。とはいえ、ようやく捕まえた相手だ。二度と手放す気は無い故に、気を付けた方が良さだろうと脳内で注意するハーデス。

不遜な戦女神の邪魔が入つたが、あの程度なら時間を掛ければ良いだけだ。しかもその手段が身体を通してのものであり、魂すらも女神から絡め取る手段ならば行使しない筈が無いとハーデスは内心嗤う。更には宿敵を屈服させるという、心理的高揚感及び充実感まで有るのだ。

ハーデスにしてみれば多用しない筈が無い。たとえもし天馬座が死んだとしても蘇生させれば済むだけであり、既に天馬座は冥界に属する者だ。むしろ完全に生者の世界である地上との縁が切れ、こちらにとつては都合が良いだけで問題は無い。

尚偶然の産物であつたが同じ冥界の者となつた天馬座の小宇宙だからこそ、ヒュプノスの復活が早まつたのは実に皮肉以外



の何物でもない。このペースならばタナトスの復活も早まりそうであるし、ハーデスにしてみれば喜ばしいだけだ。タナトスが復活すれば、女神も黄金はおろかまともに戦える聖闘士も居ない聖域なぞ敵にもならないだろう。

況や、その原因となった天馬座を完全に染め上げ、先兵として送り込んだとしたら——と、考えたハーデスの表情が緩みそうになる。もし、そうなら奴はどのような表情を浮かべるのか楽しみでならない。

完全に染め上った奴は、どのような存在になるのだろうか。完全に従僕する存在となるのか。それとも、染め変えられても尚反抗する存在となるのか。

神である自分にも予想できず、想像つかないことが楽しい。このように心躍るとは、神である自分でも驚きでしかない。

「余は奴の愚かさこそが愛しい。時既に遅く、取り返しがつかなくなっていると、あ奴が知った時……どのような表情を見せるのだろうか」

「ハーデス様の寵愛を頂いているのです。否やなぞ、ありえないでしょう」

再び神聖衣を壊れた聖衣に戻しつつも嬉しそうに呟くハーデスに対し、恭しく述べるヒュプノス。自らの手で墮としておきながら、その足掻く様を嬉々として愛でるハーデスの精神を見るに、やはり人とは相容れぬ神のものだ。

ヒュプノスにしてみれば仕えるべき主が嬉しそうにしているのだから、否やは無い。同じ冥界に属する者になったとはいえ、天馬座は所詮人間である。それどころか長年主の邪魔をしてきた怨敵が主の物になっただけだ。主が喜ぶので付随しただけであり、気に留める程の存在では無い。

「……次の聖戦が楽しみですな」

「全くだ。ようやく手に入れたのだ。……余のものだ、二度と

離さぬ。心も、身体も——魂すらも」

深い眠りにつく天馬座を愛しそうに楽しそうに見つめる主と、冷めた目で見つめる従僕神。

次の聖戦、何が待ち受けているのか。何が齎されるのか。それは誰にもわからない。

END



Another if...

聖戦から幾星霜の
時が流れ：
再び地上に
アテナが降臨した

それに伴い
冥闘士も復活し
再び聖戦が
始まろうとしていた

——そして
件の冥界といえは

死ね!!
ハーデスツ!!

冥界の神に
向かって死ねとは
相も変わらぬ
程度が知れる



うるせえッ
黙れ——!!

いいからもう
とつとと死ぬ
——ッ!!



…何をなさって
おられるのだ
ハーデス様は

ゴゴゴゴ

バクバク

見れば
わかるだろう

ペガサスとの
いつものじゃれあいを
楽しんでおられる



ペガサスが
自分だけを
見ているのが
良いのだそうだ



何が
楽しいのやら
オレには理解
できません



知るか

私にも
ハーデス様の
お考えは時折
理解できぬ



は？
なんだ
それは



……



——
そうだ……

理解されず
ともよい



快樂に
墮としても

どんなに
染め変えても



お前は全てを
余だけに
向けていれればいい

お前は
変わらぬ



それで
こそ

我が愛しき
ペガサス
宿敵よ

END

ここまでお読み頂き、ありがとうございました！

今回の話は、実は前作『冥天ノ籠獄』に入れたいネタでしたが、ページと時間の都合上泣く泣くカットしたものです。理想としては双子神にさんざん弄られ無力化されて、最後にハーデス様に献上されて陵辱されるという流れがずっと描きたかったので、ようやく冥界三神に愛でられる星矢君を描けて満足です！この設定でもっと色々なネタを描いてみたい…！

更に、その前作を読んで感想という名の小説を頂き、大いなる小宇宙を与えられて、これが滾らずにいられようか…！そういう訳で、無理を言ってその小説を寄稿して頂きまして更に更に追加不意打ち爆弾投下を頂戴した結果が最後のAnother if...でございます。頂いたSSをちょっとアレンジしたのですが描き起こさせて頂きました。殺伐殺し愛ハデ星をありがとうありがとう…！

今回は悪堕ちEDを匂わせた締めになりましたがIF設定大好きですし、諦めずに抗う星矢君とそんな星矢君を墮としたいハーデス様との攻防が延々と続いて欲しいし、一番本命なハデ星の形です。でも陵辱ばっか描いてきたので、たまにはちょっと甘さを漂わすハデ星を描いてみたくなりました。…ハデ星美味しい。

描ける限り、その美味しさをちょっとでもお届けして行けたら嬉しいです。それではまた！

2018.05 都宮

★Special thanks★
葉乃下様

<http://hoozukitei2nd.web.fc2.com/>

2018.06.02 パラダイス銀河26
2018.11.23 再販
Chrosite+ 都宮

mail nightmare2000scope-cross@yahoo.co.jp
twitter @chrosite_plus
Pixiv 2352414

印刷  **SUN GROUP**
http://www.sungroup.co.jp/

ご感想は励みになります！！



無断転載・ネットオークションへの転売は禁止致します。
不要になった際は中身がわからないように廃棄処分して下さい。



*SAINT SEIYA
FAN BOOK*

2018,06 Chrosite+